

詠

毎日歌壇

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

加藤 治郎 選

目を閉じて(ロシユ境界はもう既に壊されて
いて)口づけをした 京都市 よだか

△評▽惑星や衛星がその主星に近づける限
界距離という「ロシユ境界」が一首のポイ
ントである。人類は星々の心を持つのか。
白壁にただ一匹の黒蟻は夏季限定の季節
である 大阪市 川田ゆかり

△評▽自然は芸術を模倣するとワイルドは
言ったが、クロゼミはそれを知らない。
なせ人は水のかたまりなのだろう 人渥みの
中立ち止まっては 尼崎市 入間しゅか

壁の蛾の紋様じつと見て居ればわれの一世の
なんて簡潔 千葉市 芍 葉
道端にひとつ散りたる沙羅のはな 誰かのみ
てゐた夢かと思ふ 見附市 有村 桔梗

もつなにも怖くはないよ系統樹の一番ききに
金属の花 ふじみ野市 雨雨雨汰
黒体の放射涼しき座禅堂 瑞鳴き止み空の
声聞へ 新発田市 佐藤 榮征

日に一度ひとは胎児のかたちとなる無意識とい
う眠りのなかに 倉敷市 中路 修平
一昨年の訃報が届く 流れ星 もういないの
に光るってこと 横浜 瀬生ゆう子

鉄筋がアーチのようについで飛出して枯れた向日葵
を突き刺している 館山市 川名 房吉

予報士の外れる天気許せるも真実隠す報道の
罪科 伊丹市 岡本 信子

△評▽天気予報の外れはともかく、報道の
真実と自由は社会に絶対必須それが失わ
れたときの罪科は計り知れないと訴える。
光だけ見つめて立った向日葵は自分の影を知
ることがない 札幌市 橋 晃弘

△評▽自らの影、自らの社会の影の部分
を知る重要さをヒマワリの姿で鋭く歌う。
猛書日もいつもと姿は違うタンゴム生でみ捨
て場で働いてぞり さいたま市 長谷川文彦

空港を行き交う人の顔はみなこれから先を信
じてる顔 筑紫野市 桂 仁徳
戦争と平和の文字を通訊が手話で繰り出す八
月六日 大津市 船岡 房公

幸せな人に向かひて牙を剥く 蟻の子よりも
小さき我は 行田市 篠崎 礼子
どうやって教わったのか忘れてもふっせんか
ムをふくらます癖 陸前高田市 藤田ゆき乃

いつまでも海外ドラマは終わらずに時間を盗
み続ける犯人 ふじみ野市 雨雨雨汰
エスカレーターに乗る人みんなスマホ見て規
則正しく連はれてゆく 仙台市 小野寺健二

石段を見上げて膝と相談す無念抱きて深く拜
礼 延岡市 河野 正

かぼちやと茄子の炊いたん真つ暗なかまとか
ら手摺みした疎開児 生駒市 奥田 充子

△評▽首が夜寝静まった頃、かまどの鍋の
煮物を食べた。空腹に耐えられなかった疎
開時の記憶は具体的に生々しくつらい。
虫を許し獣を許したる祖父は林檎を盗む人を
許さず 京都市 小池ひろみ

△評▽虫や獣による被害は許すが、奥田作
品とともに、さまざまに「盗」と生。
子にりんご刺さつと思う この軸は樹と実を
繋ぐ臍の緒なのね 横浜市 友常 甘酢

第一次大戦映像の塹壕にホッチキス製のタ
ンク列なす 福山市 岩瀬 順治
疎開地へ上野駅にて迷子にならずそれゆえ現
在があると思えり 高槻市 佐々木文子

夜に咲く月下美人の真白さに母の顔を見る父の
顔見る 神奈川 多田 宏
「お義母さんの笑い声にそっけつねと夢の中
でも工夫に言はれる 八千代市 一戸 光代

鈴の森六寸余りの松笠が時に転がり妖怪思ふ
海松色の更紗に鉄を入るときジョクシヤ
カルタの工房の響 京都市 高橋よしこ

まほろば線豪雨で止まりぬ古代史のニギハヤ
ヒなど語りて三時間 奈良 島 眞澄

二人して塾の授業を抜け出してアイスを食べ
る あ、夏っぽい 東京 吉川 黎

△評▽シユの音が絡んでくる。息苦しい。
解放された夏のイメージにアイスはふさわ
しい。晴れやかなアの音に展開している。
深夜2時急かす人もない信号の点滅だけが私
の居場所 東京 秋月 六花

△評▽ひとりぼっちの深夜である。さまや
かな居場所だがそれを見つけたのである。
草原に時計をひとつ置いてきたソーダの泡の
消えていく間に 平塚市 芝澤 樹

ここでない場所に生まれたわたしでもやはり
些細な詩に泣きたらう 大津市 世田 夏雪
文章を括弧でくくる癖がある(おへるみでそ
っと包みこむように) 横浜市 朔月 七

図書館であなたの記事を複写するあたしの幸
せ、rainのち曇り 直方市 大石 聡美
写真集めくり続けて余白へと深く立ち入る古
本屋にて 横須賀市 森久保りりか

星になれなかった人がふりかえる冬のがらす
の匂いをさせて 花巻市 永汐 れい
虹の根に向かいひたすら走ってたわれの青春
錆びた自転車 岡山市 平尾三枝子

雨が降り貴方を思ふ 風が吹き貴方を思ふ
息災であれと 横浜市 荒田絵里子

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます